

中国上海の社会事情・教育事情・日本人学校と現地校の交流

— 今、上海では・・・ —

前上海日本人学校(虹橋校) 副校長

宮城県白石市立福岡小学校 教頭 高橋 伝

キーワード：上海市の社会（現地理解）、教育事情、現地校との交流

1. はじめに

中国の総人口（2005年）が約13億人、一人っ子政策をとっているにもかかわらず2000年と比較すると4045万人増加している。

さて、上海は長江の河口にできた国際都市である。平坦な土地で、市内にあるどの高いビルから周辺を見回しても日本のように山々を見ることはできない。東京都（2187km²）の約3倍の市域面積を持つ中国最大のメガポリスである。人口1778万人（2005年11月）、周辺農村部からの無戸籍の流入者を含めると実質人口2000万人とも言われる。市中心部の人口密度は50940人/km²（東京都の人口密度5661人/km²）で東京都の約10倍である。今上海は経済成長率14.8%で日本の岩戸景気やバブル崩壊前の成長率に近い。

この多くの中国人が上海で生活するための住居は、市内至る所に所狭しと建てられた高層住宅（マンションや集合住宅等）である。以下、3年間上海で生活し見聞きした一端を「社会事情、教育事情、現地校との交流」という観点で紹介していく。

2. 中国上海の社会事情

中国生活で感じたことは、中国はまさに発展途上の国ということである。中国国民大部分の生活は決して豊かではない。上海は中国の中でも特別の地域であり、生活レベルは地方と比較すると豊かである。その生活様式は二極化している。少数ではあるが、現代の最先端のITをはじめとした生活様式を取り入れ高級マンション（あるいは、大きな住宅）に住み、高級車を乗り回す富裕層、もう一方は、今から40年以上前の貧しい日本の生活（戦後で物がなく貧しい生活をしていた日本を見るような生活）をしている人々である。そういった人々が同居している街が上海である。



<裏通りの路地>

華やかな商店街やホテル街を一步裏道に入るとそこは、一般庶民の生活の場（集合住宅）になる。それらの住宅はレンガを積み上げただけで耐震装置などしているはずもなく、阪神淡路大震災のような大きな地震でもきたらたいへんな被害が出るのではないかと想像できる。そこで生活する人々の平均月収は（聞いた話）600～700人民元程度（日本円で約一万円程度）である。大学卒の初任給が平均2000～3000人民元（4～5万円程度）というから、どの程度の生活レベルか想像できるかと思う。もちろん、物価は安い。例えば、日本の食生活に例えるならば、ラーメン一杯（日本のラーメンとは違うが、庶民が口にする麺類）の値段が5～6人民元（100円程度）であり、タクシーの初乗りが11人民元（160円程度）である。20～30キロの距離を乗っても50人民元（800円程）ぐらいである。

それに、中国（上海）ではコピー商品（偽物ブランド品）が出回っている。ブランドのカバンや時計はその代表であるが、その他にゴルフクラブ・バッグ・シューズ等のゴルフ用品、帽子やTシャツ、ポロシャツ等の衣料品、

音楽・映画等のCDである。CDのラベルなどは本物そっくりで見分けがつかない物までである。値段は、映画のCDで20人民元ほど（約300円ぐらい）である。今はもう無くなった街だが、赴任した当時の代表的な偽物市場「シャンヤン」には、300軒～500軒ほどの店が立ち並んでいた。さしずめ、ノミの市・アメ横といった感じで、観光客などが一日に数万人と訪れていた。偽物市場「シャンヤン」は、なくなったが、今でも市内の至る所にそういった店が進出している。中国は発展途上の国であるが故なのか、コピー商品を作ることが著作権の問題があり、してはいけないという意識は低い。また、貧しさから抜け出すにはなりふり構わないという態度が見受けられる。中国政府も取り締まりを強化するなど、対策を講じてはいるが、国民の一人一人にまでは浸透していない。

庶民が生活している生活圏の街並みは、都会の下町といったところである。食堂・パン・ケーキ屋・床屋・美容室・果物屋・スーパー（魚屋はない）・自転車屋・不動産屋・和風のレストラン（飲み屋）・コンビニ・コーヒー



<生活圏の町並み>

ショップ・マッサージ店（日本には馴染みがない）等々が間口2軒ほどの店構えで商売を営んでいる。

道路に目をやれば、タクシー（これがやたらと多い）・自家用車・バス・ワゴン車・リヤカー（トラック以上に活躍している）・バイク（バッテリーで静かに動くバイクも多い。日本には馴染みがない）・自転車等が切れ間なく往来している。

驚くのは、車の多さと、横断の仕方である。例えば、子供たちが、道路を横断しようとしても、たとえ、信号機のある横断歩道であっても、右から左から車がくる。右折車は赤信号に関係なくどんどん右折してくる（中国の道路交通法ではそうなっている）のである。安心して横断するには、経験と

慣れと瞬時の判断力が必要となる。横断しようとして、一歩判断を誤れば、交通事故にあってしまうのではないかと思う。しかし、中国の人々は、場所にもよるが信号機のない道路を車の合間を縫って軽々と横断していく。きちんとルールを守る日本人との違いがはっきり分かる場面である。

3. 中国上海市の教育事情（現地校）

まず、中国（上海）の一般的な教育事情についてであるが、小学校は5年生までである。6年生は中学生の予備軍という位置づけで中学校に通う。中学校は3年生までである。現地小学校の教育課程だが、基本的には日本の小学校と大差はないが、細かく見るとだいぶ違いがある。例えば、日本という運動会や学習発表会はない。それに道徳や社会科もない。しかし、英語教育にはかなり重点が置かれ、学年にもよるが週4時間～6時間程度の時数が組まれている。それ以外では、国語（中国共通の中国語）、算数、科学（理科）、音楽、図工、体育等がある。指導内容には偏りがあり、学校にプールではなく水泳指導は一切ない。ある小学校では、体育の内容がほとんどサッカーであった。

さて、英語教育だが、小学校1年生から週4時間程度の指導が行われ、カリキュラム、指導者、さらに教材等も充実していた。教科書（テキスト）は、個人で購入するが、一教科当たり5～20人民元（70円～300円程）。前期・後期に分かれておりカセットテープがついている。授業参観をさせていただいた時は、4ヶ月目の1年生だったが、教師は英語だけで授業を進めていた。授業終了後のインタビューから、明らかになったことは以下の通りである。

- (1) 英語教育のねらいは、読み書きよりも「聞く」「話す」に重点を置いている。
- (2) 授業中は、視聴覚機器を多用しているが、上海市ではどの小学校でも各教室に標準的に備え付けられている。教材は市販のものから手作りのものまでいろいろである。
- (3) 英語の授業では中国語を使うことはない。1年生の1～2ヶ月は、中国語の解説を入れながら授業を進めるが、

その後は英語だけで授業を展開している。

- (4) 歌やゲームを取り入れながら授業を進めている。なぞなぞ形式の遊びや伝言ゲームなど、授業の展開には工夫している。
- (5) 英語の授業は、現在、上海市では小学校1年生から実施している。以前は、5年生からの学習だったが、今は1年生からとなった。今や英語は国際語（共通語）として捉えている。そのような意識から英語教育を早い段階で取り入れている。

<小学校で使用している教科書（テキスト）について>

1年生から英語のテキストが準備され授業で使われている。どの学年も1年間に2冊のテキスト（A・Bの2冊）があり、ほとんどカセットがついている。テキストは市販され、保護者は指定されたテキストを購入しなければならない。価格は日本円で200～300円程度。Oxford Englishのものなどが使用されている。テキストの他に練習帳までセットになっていて、学習したことを練習帳（ドリル的）で復習できるようになっている。

学年があがるにつれて、当然内容は難しくなっている。

【例】5年生の内容

Unit3 What is the weather like ?

<look and read>

A long time ago, there was a farmer. His name was Hong. He lived in China. He has some pigs on his farm.

He had some ducks and some chickens. He had a dog and a cat. It was spring. It was warm and wet.

Hong planted some rice. It was summer. The sun was hot. Hong built a new house. It was autumn. It was cool and dry. Hong cut the rice. He put the rice in his house. Then it was winter. It was cold and windy.

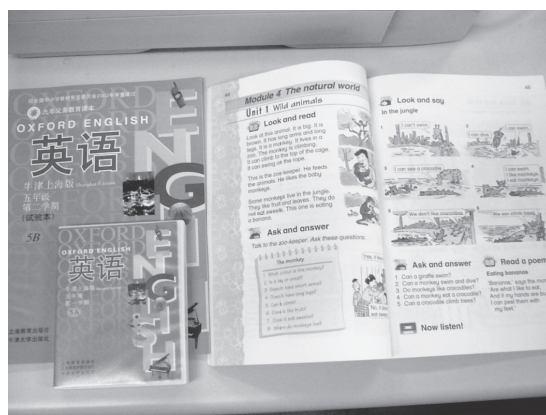
Hong was in his house. it was warm in the house.

<Ask and answer>

1 What did Hong plant? 2 What did Hong build? 3 What did Hong cut? 4 Where did Hong put the rice? 5 Where was Hong in the winter?

日本では、学習指導要領が改正になり、平成23年度から本格実施となる外国語活動（英語活動）だが、教育現場でどの程度の指導ができるか、まだ見えてこない部分もある。それに比べ中国上海では、テキスト等も準備され「聞く」「話す」に重点を置いた本格的な授業が行われている。教師の英語レベルもかなり高い。英語でテーマに沿った討論ができるレベルである。しかし、そのような教育が中国全土で行われているわけではなく、一部の都市だけで行われているようである。地方によっては、学校設備も教員の数も十分ではなく、満足のいく教育をすべての児童が受けているわけではない。中国の教育は都市と地方では、まだまだ格差が大きい。訪問した上海の小学校は一般的な地域の現地小学校だったが、日本でいう学級費的な費用を支払えない家庭数が半数ほどだということだった。ここにも貧富の差が大きく影響していることを強く感じた。

また、上海での英語教育は始まったばかりである。従って、今現在、普段の生活の場（買い物する店、レストラン、タクシー等）で英語が通じるところはほとんどないのが現実である。しかし、今後10年～20年後、上海では英語が通じる街になっているかもしれない。英語に関して、日本と中国では、「話す」「聞く」という観点で、かなり



<5年生 英語のテキスト>

の差が出ているだろうと推測できる。

4. 現地校との交流 =上海小学との交流 (小学3年) = H.17.5.30

上海日本人学校では、上海にある日本人学校の特性を生かした教育課程の一つとして、意図的計画的に全学年が現地小学校との交流活動を行っている。その中の一つ、日本人学校の小学校3年生が現地校である「上海小学（小学校とは言わない）」と交流したときの様子を紹介する。

当日は5月30日、少し汗ばむ初夏の陽気の下、上海日本人学校小学部3年生267名が地元の上海小学にバス9台で訪問し、上海小学3年生と交流を行った。日本人学校と上海小学両校の児童司会（日・中の2カ国）のもと、開会行事を行った後、自己紹介も兼ねた名刺交換。中国語の時間に学んだ中国語で、簡単な自己紹介などを取り入れながら手作りの名刺を交換した。言葉がうまく通じないこともあり、初めは黙って様子を伺っていた子も多く見られた。しかし、しばらくすると相手の笑顔にほっとしたのか、だんだんうち解け、身振り手振りも使って交流していた。

その後は、上海小学の表現発表。「体鍛課」と呼ばれる準備運動として行われる体操を見せてもらった。太極拳の技も取り入れたとてもユニークな体操だった。上海小学は150名ほど。校庭に等間隔に10列ぐらいに並び、音楽に合わせてパフォーマンスを見せてくれた。一人ひとりの動きもきれいにそろい、とても見栄えのするものであった。

表現体操の後は、「中国凧揚げ」体験。6月1日が中国では「児童節」といって、日本でいう「こどもの日」にあたる。上海小学では、この時同説にちなんで、その前後の数日間、「凧揚げデー」と位置づけ、児童みんなが凧を作り凧揚げを楽しんでいるということである。凧は、日本の凧とは違い中国凧である。各グループに2つほど凧を用意してもらい、上海小学の児童に手ほどきを受けながら凧揚げを楽しんでいた。凧は手作りのものもあれば、市販のものもあった。

5. 最後に

中国は、とにかく国土が広く、多民族国家である。確かに貧富の差も大きく人々の暮らしも教育も地方によって全く違う。中国を語る時、「中国の一部を知って中国を語るな!」ということわざがあるようだ。それは、中国を「象」にたとえている。象は体の大きな動物である。象の一部である足、あるいは象の耳や鼻を紹介しても象を紹介したことにはならない。つまり、中国はそれほど広大で複雑だということである。紹介した内容は中国上海のほんの一部の諸事情である。これから中国は大きく成長し世界をリードする国になるであろう。

今後、日本の社会、あるいは、教育がどのように成長し発展していくのか予測できない部分もあるが、中国上海の社会や教育事情は目に見えて大きく発展していくと推測できる。今後とも継続して見ていきたい。